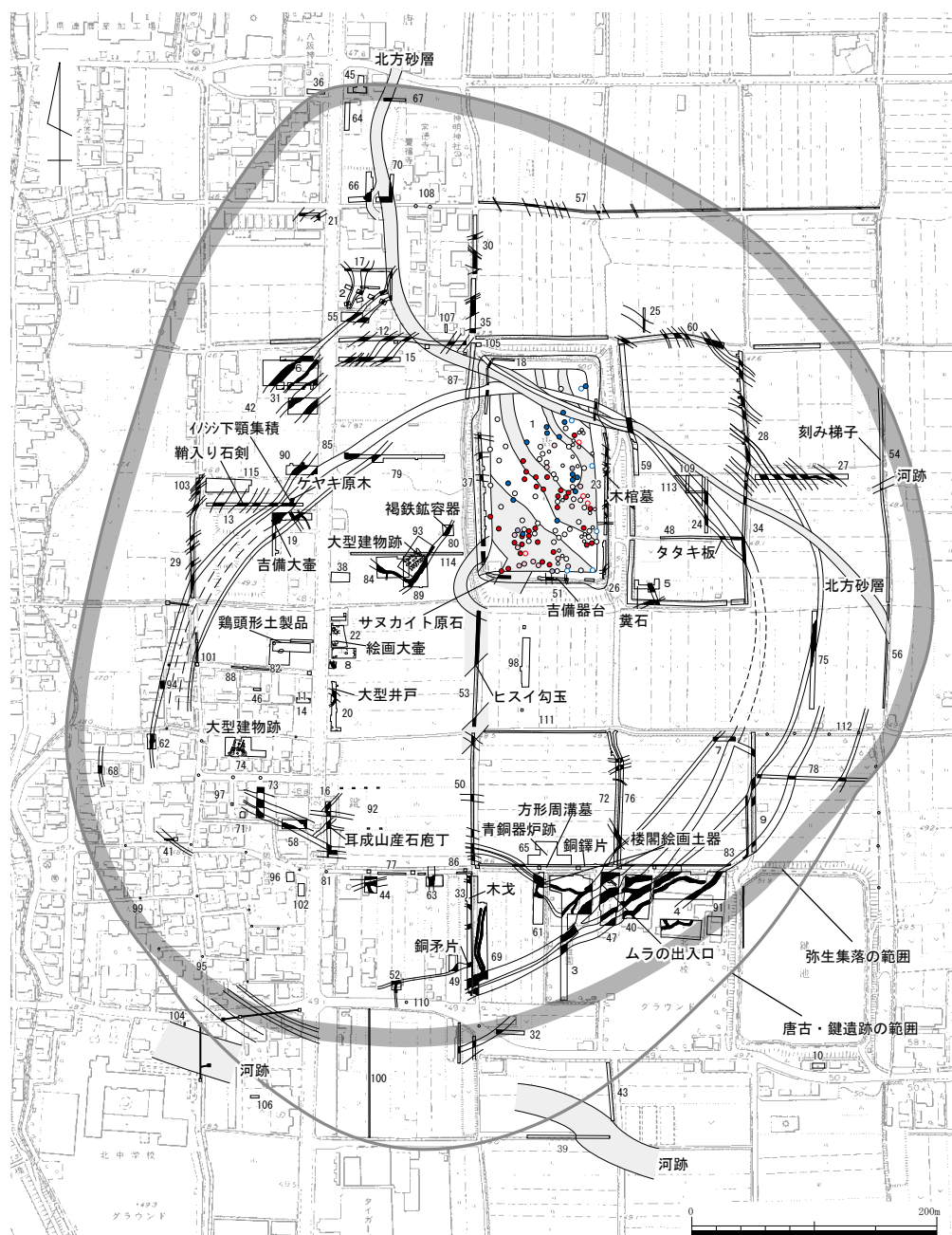


第3章 唐古・鍵遺跡の概要

1. 調査成果の概要

(1) 総括

唐古・鍵遺跡の調査は、唐古池の発掘調査を第1次とし、これまでに115次に及ぶ調査を実施してきたが、遺跡面積42万㎡に対し調査面積はその8.6%の約36,200㎡である。ただし、唐古池の第1次調査が工事立会程度で精度に欠いており、その面積が約12,000㎡であることから、近年の緻密な調査としては6%でしかない。しかしながら、これまでの調査成果からでも十分な内容が判明している。



第3-1図 唐古・鍵遺跡調査成果図

第3-1表 唐古・鍵遺跡 総括表

遺跡面積	42 万 m ²	
規模と形状	東西 700 m・南北 800 m、楕円形	
発掘調査	第1次（1936・1937年）～第115次（2014年）	
調査面積	36,178 m ² （うち第1次約 12,000 m ² と推定）	
遺物量	12,967 箱（第3次～第115次分、箱の大きさ W40 × D60 × H15 cmで換算）	
時代と 遺跡の性格	弥生時代前期（縄文晩期土器もわずか）～古墳時代前期	集落
	古墳時代中期～古墳時代後期	集落
	古墳時代中期？～古墳時代後期	古墳
	奈良時代～平安時代	集落（荘園？）
	鎌倉時代～室町時代	屋敷（居館）
	江戸時代	屋敷・農地・溜池

（2）主要遺構

唐古・鍵遺跡は、弥生時代から近世に至るまで時代ごとにさまざまな性格を有するとともにそれらが重層的、あるいは前時代の遺構を破壊しながら土地を占有している。各時代の遺跡を構成する遺構も複雑で、特に集落遺跡では居住に関するさまざまな遺構が検出されているが、遺構の性格を特定するのが困難なものも多い。特定できる主要遺構としては、弥生時代の大型建物2棟、大環濠、多重環濠や古墳時代の前方後円墳、奈良～平安時代の板組井戸、鎌倉～室町時代の居館環濠、江戸時代の屋敷の井戸、唐古池の堤防などがある。

（3）主要遺物

唐古・鍵遺跡の出土遺物のうち弥生集落に関係する遺物としては、土器、石器、木製品、金属器、骨角器、獣骨や種子類の食料残滓などがあり、多種多様である。遺物の多様さと量、そして質は他の遺跡がおよぶところではない。ひとつの遺跡で、弥生時代を通してさまざまな遺物が揃う点でこの遺跡の重要性は高い。さらにこれら多種多様な遺物は、溝や土坑などの遺構あるいは土層単位で把握することができ、時期が特定できることや遺物の共伴性から考えられる遺構・遺物の性格などその資料的価値は高い。

遺跡を特徴づける遺物としては以下のものがみられる。

- ・ 全国出土量の三分の一におよぶ絵画土器
- ・ 北部九州、吉備、伊勢湾岸、天竜川流域、信濃地域からの搬入土器
- ・ 銅鐸鋳型をはじめとする青銅器鋳造関連遺物
- ・ 褐鉄鉾容器とヒスイ製勾玉などが示す特殊遺物
- ・ 木製品や石器など原材料から製品までの製作工程を示す遺物
- ・ 食料事情や環境復元が可能な動植物遺存体

2. 唐古・鍵遺跡調査と遺跡保存への取り組み

唐古・鍵遺跡が考古学界に知られるのは、高橋健自氏が明治34(1901)年に「大和考古雑録」(『考古界』第1篇第7号)のなかで「磯城郡川東村大字鍵の遺跡」として紹介したのが始まりである。その後弥生文化を総合的に把握する上で重要な役割を果たした昭和11・12(1936・1937)年の末永雅雄氏による唐古池の発掘調査とその報告書『大和唐古弥生式遺跡の研究』(昭和18年)がある。第1次調査以降、長らく発掘調査はおこなわれていなかったが、昭和52(1977)年の第3次調査が契機となって継続的に調査が実施されるようになった。これ以降の調査は、唐古・鍵遺跡の出土品が弥生研究に与えてきた影響や他の弥生遺跡の理解に果たしてきた役割などを5つの段階にとらえると理解しやすい。

第3-2表 唐古・鍵遺跡 調査の歩み一覧表

第1期	1977～1982年 (第3次～12次) 奈良県立橿原考古学研究所
	～遺跡の範囲を特定するための調査で遺構の密度や継続時期、遺物包含層の有無や厚さ、環濠の特定など資料の蓄積
第2期	1982～1988年 (第13次～33次) 1982年以降は田原本町教育委員会
	～遺跡範囲の特定
第3期	1988～1996年 (第34次～60次)
	～集落の地形と遺構分布状況、多条環濠の変遷や環濠集落周辺の環境を把握
第4期	1996～2004年 (第61次～98次)
	～史跡指定に向けての遺跡の内容確認調査
第5期	2004年～ (第99次～)
	～小規模な開発と公園整備に伴う調査

3. 唐古・鍵遺跡の古環境

(1) 唐古・鍵遺跡の微地形復元

唐古・鍵遺跡の現状は、古代から中世に条里制として整備された水田が大半で、弥生時代の地形は現状では見られない。高橋学氏(立命館大学教授)による唐古・鍵遺跡周辺の10cmの等高線図からは、微高地および谷地形が読み取れる。これらの状況を発掘調査の成果に照らしてみれば、弥生時代の奈良盆地の地形は、かなり起伏があったことが想定される。

(2) 唐古・鍵遺跡周辺の古環境と景観立地

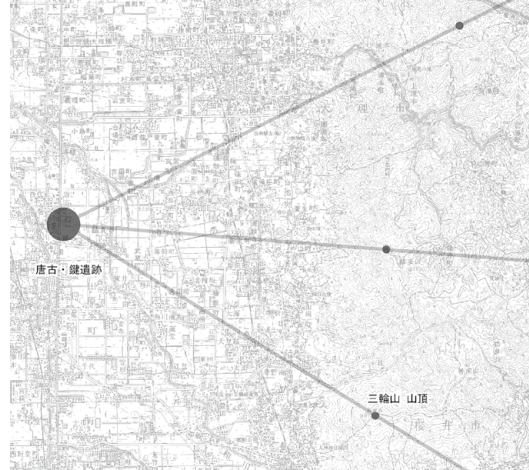
金原正明氏(奈良教育大学教授)の分析によると、集落が営まれる以前の自然環境は、イチイガシを中心とする照葉樹林で、低湿地にはハンノキなどの湿地林が分布していたが、集落の形成、農耕の営みにより、植物相は一変する。イネ科の雑草類が繁茂し、クワなどの二次林要素の樹林が多くなり、環濠には水田雑草が生育し、遺跡周辺にはカシやスギなどの樹木も分布

していたと考えられている。

景観の研究としては北條芳隆氏（東海大学教授）の研究がある。唐古・鍵遺跡から見た奈良盆地東方の山塊からの日の出と山塊との関係である。このことは、唐古・鍵遺跡の立地する位置が重要であり、この遺跡が特異な空間構成の中におかれ、暦も管理するような計画的な集落であった可能性を示している。



第3-2図 唐古・鍵遺跡の鳥瞰図
北西から南東を望む
(唐古・鍵考古学ミュージアム展示映像)



第3-3図 唐古・鍵遺跡と東方山塊の位置関係

4. 唐古・鍵遺跡の歴史的変遷

第3-3表 唐古・鍵遺跡の歴史的変遷一覧表

時代区分	概要
弥生時代前期： 集落の成立・分立	・ 微高地上に2、3の比較的小規模な集落が形成される。
弥生時代中期： 大環濠集落の成立・発展	・ 直径400mの範囲を囲む大環濠集落へと発展。3ヶ所の集落の一つの巨大集落への変貌と環濠の多条化。
弥生時代後期初頭： 環濠集落の再建と発展	・ 中期末における洪水災害と後期における集落規模の拡大。
弥生時代終末から古墳時代前期： 環濠集落の解体と分立	・ 奈良盆地の多くの弥生遺跡と同様の、環濠の放棄と集落の解体。 ・ 古墳時代前期に3ヶ所の集落が分立、環濠の再利用。
古墳時代： 小規模古墳群	・ 遺跡の西半を中心に小規模古墳群が展開、東半では集落遺構の出土。 ・ 有力な地域首長の存在が想定される。
古代： 田中庄の存在	・ 興福寺の荘園（1070年）以前の文献における「田中庄」の存在。 ・ 10世紀頃から荘園を管理する施設が存在。（推定）
中世： 唐古氏の居館	・ 在地武士の登場と14世紀代の東西100m以上、南北300mほど（推定）におよぶ唐古氏の大規模な居館。
近世以降： 現在の景観	・ 幕藩体制による在地武士の帰農と集落の統廃合。 ・ 現在見る、唐古集落と鍵集落、唐古池と鍵池、水田が創り出す景観。

5. 唐古・鍵遺跡の史跡指定

(1) 史跡の指定理由

唐古・鍵遺跡の史跡指定は、田原本町が平成10年7月9日付けで、県を通じて文部大臣宛に「史跡指定申請書」を提出し、文部大臣より文化財保護審議会に諮問、文化財保護審議会の答申を受けて、平成11年1月27日(官報第2553号 文部省告示第18号)に指定となった。以下に『月刊文化財』(423号 平成10年12月 文化庁)の掲載文を転載する。

「本遺跡は、弥生時代研究において画期的な基礎をつくった学史的に著名な遺跡である。またわが国有数の規模を誇る拠点的な多重環濠集落であり、弥生時代の一中心地であった近畿地方中枢部における社会の実態やその変遷過程を示し、さらに多種多様な出土遺物は当時の生活の実態を伝えるうえできわめて重要である。よって史跡に指定し保護しようとするものである。」

(2) 史跡指定に至る経過

当初史跡指定を受けたのは、第1次調査がおこなわれた唐古池とその周辺の300m四方の範囲であり、唐古・鍵弥生集落の居住区の北半と北側環濠帯にあたる。国道24号の西側については、平成14(2002)年12月に1,857.93㎡が追加指定された。その後も平成20(2008)・平成22(2010)年にも追加指定をおこなった。

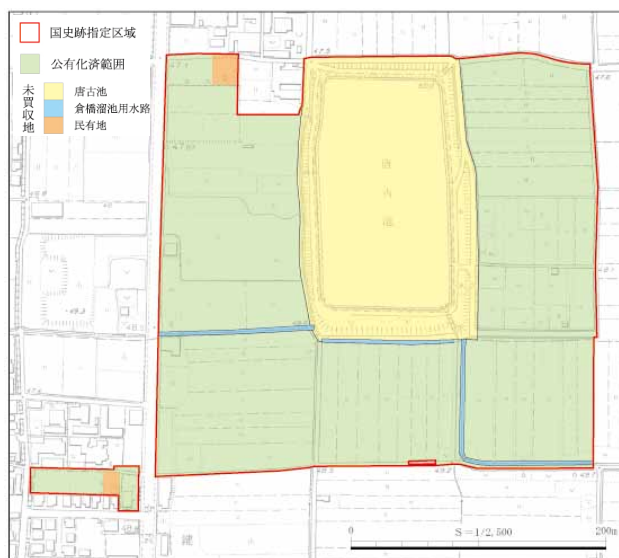
第3-4表 指定経過一覧表

	告示番号	告示日	所在地	筆数・所有者	面積
指 定	文部省告示第18号	平成11年 1月27日	唐古50番2外	159筆63人	98,957.73㎡
追加指定1	文部科学省告示第209号	平成14年12月19日	鍵248番2外	8筆2人	1,857.93㎡
追加指定2	文部科学省告示第40号	平成20年 3月28日	鍵300番1外	2筆2人	442.18㎡
追加指定3	文部科学省告示第128号	平成22年 8月 5日	鍵248番3外	1筆1人	432.52㎡

※ 面積は公簿面積での指定申請

(3) 史跡地の公有化と土地利用

田原本町では、史跡内の民有地について平成11年度から公有化事業に着手しており、平成25年度までに127筆、70,704.75㎡を公有化した。

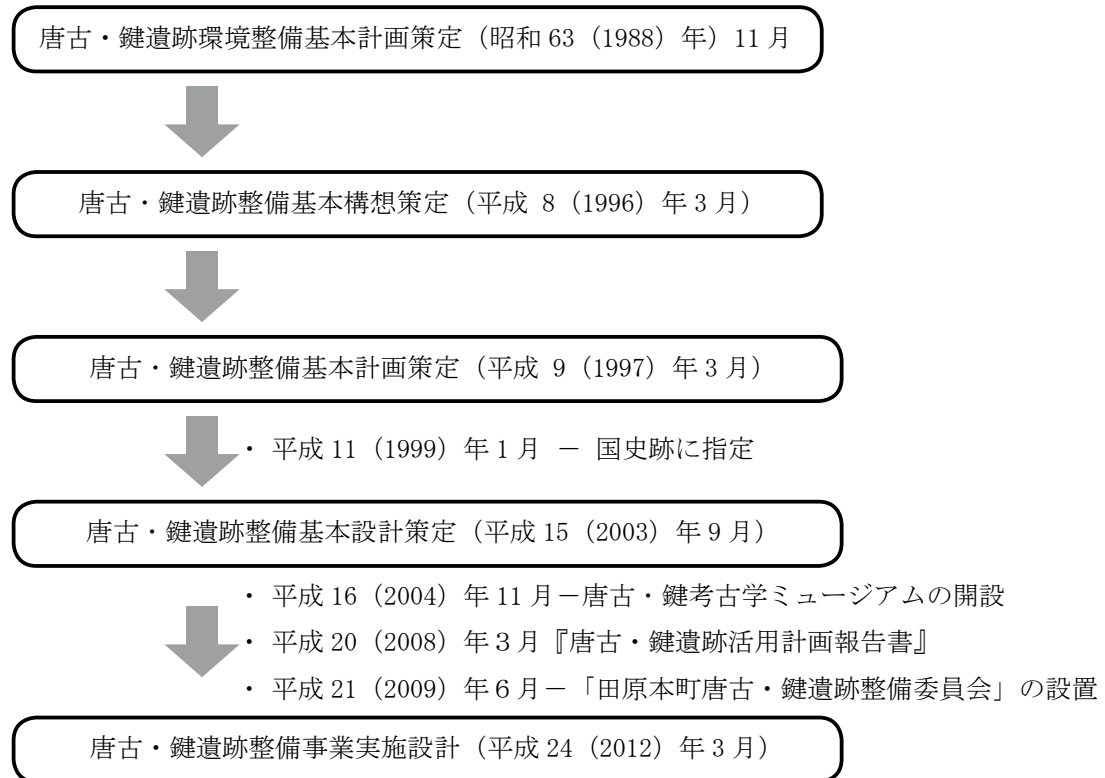


第3-4図 指定地の公有化状況図

6. 史跡地の公園整備計画

(1) 整備計画の経緯

田原本町では、昭和 52（1977）年の第 3 次調査以降、史跡指定に向けて範囲確認調査を実施するとともに最終的な公園整備の構想にも取り組んできた。以下にその経緯を示す。



(2) 公園整備事業の進捗

公園整備事業は、「田原本町唐古・鍵遺跡整備委員会」を設置した平成 21（2009）年から平成 26（2014）年にかけて、唐古池を除く公有地について第 1 次造成をおこなった。平成 26（2014）年から平成 30（2018）年にわたって、植栽・環濠復元・遺構展示施設建築等をおこない、完成を目指している。

